
鈴の音、響く時

霧 一天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈴の音、響く時

【Nコード】

N5865C

【作者名】

霧 一天

【あらすじ】

死のうと思った悠雅の前に現れた少女。その少女は、悠雅の命を助けてくれた。

汗が、じんわりと額ににじみ出る。

風が吹いて、涼しさを感じる。

指先は、とても冷たい。

一步、歩く。段差を上る。下を見下ろせば、遙か遠くにコンクリートの道路が見える。車が忙しなく行きかって、走るエンジン音もうるさくてかなわない。

無意識に拳を握った。

（俺は今から、死ぬんだ）

もううんざりだった。親に引かれた道を歩くのは。性根が腐りきった奴等の集まる場所に居るのは。もう、全ての事にうんざりしていた。

今から此処を飛び降りたら、簡単に死ぬる。うんざりする事も無くなる。

今から、死ぬ。恐怖なんてものは無い。

周りから音が消えていく。うるさいエンジンの音も消える。自分の、ゆっくりとした鼓動の音だけが聞こえる。

両手を広げて、飛ばうとしたその時――

チリン。

心臓の音だけの世界に、鈴の音が響いた。

チリン・・・・・・・・チリン・・・・・・・・。

何度も何度も響いた。鈴の音がだんだん近づいてくる。

チリン、チリン、チリン

音ははっきりするにつれて、音が早くなっていく。

チリン・・・・・・・・。

不意に、鈴の音が聞こえなくなった。そこでやっと、はっとする。音が一気に戻ってきた。

後ろを振り返ると、小学校一年生くらいだろうか、おかっぱの少女が、赤い着物を着て立っていた。着物には、白い百合の花が咲いている。

「死にたいの？」

少女が、口を開く。

「……………うん、死にたい。俺は死にたい。だから、此処から離れてくれない？」

少女は、動くつもりはないらしい。じっと、此方を見つめている。

「お兄さん、名前は？」

「俺？ 俺は志乃月^{シノツキ} 悠雅^{ユウガ}。君は？」

「……………わたしは、鈴ノ音^{スズネ} 音樹^{ネキ}」

変わった名前だと思った。

「音樹ちゃん、此処から離れてくれないか」

「何で、死にたいの？」

悠雅の言葉には耳を貸さず、少女は質問をしてきた。

「……………うんざり、してるから。もう、この世界に居たくないんだ」

「だから、死にたいの？」

「うん、そうだよ」

だから早く離れてくれ。此処から消えてくれ。

声には出さず、心の中で音樹に言った。けれども、音樹はまだ動こうとしない。

「うんざりしてるから死ぬなんて、馬鹿みたいだね」

「なんだと……」

「なんでうんざりしてるからって、死ななきゃいけないの？」

言葉が、詰まった。

理由なんて、ただうんざりしてたから。それだけだ。うんざりする事から開放されたくて、死ぬ。ただ、死にたいって思っただけだ。

「――」

「わたしは、お兄さんの死にたい理由は馬鹿げてると思うよ」

馬鹿げてる――。

確かに、馬鹿げてる理由だ。この少女に言われるまで、気づきもしなかった。けど、気づいたからといって、死にたくなかった訳じゃない。

「……理由なんて関係ない。馬鹿げてる、なんて言われても俺は死にたい。邪魔しないでくれないか」

鋭く言ったつもりだが、音樹は平然としていた。

「そう。じゃあもう邪魔はしないよ。飛び降りるでも首をつるでも、好きなようにしたら良いよ」

そう言う音樹は、その場から離れようとはしない。

さすがに子供の前で死ぬ事も出来ずに、かと言って存在が邪魔なんだ、と言える訳もない。

「どうしたの？」

「いや・・・・・・・・離れてた方が良いんじゃないか？」

心配して言ったのに、音樹はくすくすと笑った。

「お兄さんが、離れてほしいだけでしょ？　わたしは構わないよ？」

「・・・・・・・・」

構わないと言われても、人がいるとそういう気分になれなかった。

「・・・・・・・・ねえ、お兄さん。人は死んだら何処へ行くと思って
る？」

「・・・・・・・・さあね。俺、死んだ事ないから」

何がおかしいのか、音樹は噴出した。

「ふふっ。人はね、死んだら天国へ行くんだよ」

「地獄には行かないのか？」

「地獄はね、自分から死んじゃった人が行くんだよ。人が言うように、自分で死んじゃったら何処にもいけなくて、ずっと此処にいる。なんて事はないんだよ」

じっと、悠雅の目を見ながら話す。そして続けた。

悪い事をした人は、天国で良い事をする。悪い事をした分きっちり。そうしたら、生まれ変わる。そして、最初から良い事をしていた人は、すぐにでも生まれ変わって、またこの世に生を受ける事が出来る。けれども自殺をした人は決して天国へは行けず、ただ地獄の中をさ迷い続けるだけ。

「よく知ってるね。何処でそんな事覚えたの？」

正直、悠雅は一切信じていなかった。ただの子供の戯言だしか思ってしまった。

「これを教えてくれたのはお父さんだよ。死神の一番偉い人。本当は血は繋がってないけどね」

「死神なんだ。じゃあ君も死神さんかい？」

冗談半分で聞くと、音樹は頷いた。

「そうだよ。わたしのお仕事は、自ら命絶つ者を監視する事なんだ」
「ふーん。じゃあ俺の事監視してんの？」

「そうだよ。お兄さんが死んだ後、お兄さんの魂を回収して地獄に送るの」

よくここまで考えられたな。と思った。冗談にしてはなかなか上手い。

「お兄さんに信じさせてあげるよ」
「は？・・・うわっ!？」

次の瞬間、強い風が吹いた。

悠雅は思わず目を瞑る。

風が止んでから恐る恐る目を開けてみた。

「なっ!？」

目の前に広がった光景は、信じがたいものだった。

昼だったのが夜になり、紅い月が輝いていて、音樹の紅かった着物は黒へと変わり、白い百合の花だけは変わっていない。手には音樹よりも遥かに大きい巨大な銀の鎌。恐らく、悠雅が持っても相当な大きさだ。当然重い筈なのに、音樹はそれを平然と持っていた。

「さあ、お兄さん。早く死んでね。わたしには次のお仕事があるから」

「っ・・・・・・・・」

先ほどまで、小さく感じていた少女が、急に大きくなったように感じた。

口の端を上げるだけの笑みは、鳥肌が立つような感覚に成る程不気味だ。

「どうしたの、お兄さん？」

声を発する事も出来ず、ただただ目の前の音樹を見詰めるしか出来なかった。

そして、漸く気がついた。

死ぬのが、怖いと思ってる事に。死にたくないと思ってる事に。

音樹が現れるまでは、怖くもなんとも無かった。しかし、今は怖い。

「お兄さん、本当は死ぬのが怖いでしょ？」

今度は、ふわりと微笑んだ。

一瞬にして、景色が戻っていた。

「お兄さん。まだ、お兄さんの心は死にたくないって言ってるよ。まだ生きたい。この世界で、くだらなくても良いからって」

「俺の、心が？」

聞き返すと、音樹はうんと頷いた。

「だって、死にたくないってさっき分かったでしょ？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

確かに、先程思った。死にたくない。死ぬのが怖いと。
でも、何故音樹がその事を分かったかが分からない。

「お兄さんにこれあげるね」

そう言って音樹に渡されたのは、銀色の小さな鈴。それをじっと見詰める。

渡される際、小さく鳴った。

チリン――

鈴の音色は、音樹が現れる前に鳴った音と一緒にだった。

「っ、これ！」

顔を上げると、もう音樹の姿は消えていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そこで、悠雅は気がついた。音樹の、本当の仕事を。音樹の仕事は、自ら命絶つ者を監視する事ではなく、自ら命絶つ者に己の心を分からせる事。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ありがと、音樹ちゃん」

たった、ほんの数分程度しか会っていない少女に、命を救われた。そして、生きている事がくだらなくても、うんざりしても、命を投げ出す事はいけないと教えてくれた。

「地獄に行かなくて済んだや」

その後暫く、一人で笑った。

明日、友達と呼べる人間にでも話してみようと思った。今日会った事を。

きっと馬鹿にされるだろう。でも、話したかった。

鈴の音、響く時に現れた少女の話を。

人は、死ぬと何処に行くかを。

きっと、笑われるだろうな。頭がおかしいと思われるかも知れない。でも、それでも良い。

まだまだ人生は長いから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5865c/>

鈴の音、響く時

2010年10月10日01時35分発行